

[原著論文]

参加者の視点からみた高齢者「ふれあい・いきいきサロン」の意義

豊田 保

キーワード：ふれあい・いきいきサロン，高齢者，参加者，地域社会

The significance of the “Fureai – Ikiiki Salon” from the perspective of elderly participants

Tamotsu Toyoda

Abstract

The Japan Council of Social Welfare has defined a “Fureai-Ikiiki Salon” as “enjoyable social activities jointly determined, planned, and run by involved residents and volunteers based in the community, these activities are intended to encourage the elderly to be active by having individuals who live alone, live with family but eat lunch by themselves, or who shut themselves in with no one to talk to eat together so that they feel comfortable going out and socializing.” In this research, 75 elderly individuals who participate in a “Fureai-Ikiiki Salon” for the elderly at 5 sites in Kita Ward, Niigata were randomly selected and individually interviewed, and this paper discusses the significance of such “Fureai-Ikiiki Salon” for the elderly from the perspective of the participants. When considering the lifestyle desired for the elderly, the goal is to enhance their individual role as residents and their leisurely activities, but as this research found enriching interpersonal relationships in the community by steps like actively creating opportunities for residents to socialize is also vital. In this sense, a “Fureai-Ikiiki Salon” for the elderly is an activity “intended to encourage the elderly to be active” by “eating together so that they feel comfortable going out and socializing.” As a form of activity that intended to enrich interpersonal relationships in the community, it is effective for the elderly.

Keyword：Fureai-Ikiiki Salon,elderly,participants,community

要旨

全国社会福祉協議会は、「ふれあい・いきいきサロン」について、「地域を拠点に、住民である当事者とボランティアが協働で企画し、内容を決め、共に運営していく

楽しい仲間づくりの活動であり、一人暮らしであったり、家族がいても昼間は一人きりで、会話をする相手もなく閉じこもりがちに暮らしている高齢者などが、気軽に出かけて仲間づくりをしたり、一緒に食事をするこ

新潟医療福祉大学 社会福祉学部 社会福祉学科

[連絡先] 豊田 保

〒950-3198 新潟市北区島見町1398

TEL/FAX:025-257-4472

E-mail: toyoda@nuhw.ac.jp

により、高齢者がいきいきと元気に暮らせることをめざす活動である」と定義している。筆者は、新潟市北区内で開催されている5か所の高齢者「ふれあい・いきいきサロン」に実際に参加している無作為に抽出した75名の高齢者に対する個別面接調査を実施し、参加者の視点に立脚した高齢者「ふれあい・いきいきサロン」の意義について考察した。その結果、高齢者にとっての望ましい生活のあり方を考える場合、個人としての家庭での役割や趣味の活動などを豊かにしていくことと併せて、住民同士の交流を積極的に創出することをはじめとして、地域社会における人間関係を豊かにしていく地域づくりが重要であるとの結論を得た。この意味で、高齢者「ふれあい・いきいきサロン」は、「高齢者が気軽に出かけて仲間づくりをしたり、一緒に食事をするにより、いきいきと元気に暮らせることをめざす活動」として、地域社会における人間関係を豊かにしていくための地域づくりの活動の一つの形態として、有効性を持っていると結論できる。

I 本研究の目的と方法及び意義

全国社会福祉協議会によれば、「ふれあい・いきいきサロン」の定義は、「地域を拠点に、住民である当事者とボランティアとが協働で企画し、内容を決め、共に運営していく楽しい仲間づくりの活動」とであるとされている。また、「ふれあい・いきいきサロン」が何をめざすかについては、「ひとり暮らしであったり、家族がいても昼間一人きりで、会話をする相手もなく閉じこもりがちに暮らしている高齢者などが、気軽に出かけて仲間づくりをしたり、一緒に食事をするにより、高齢者がいきいきと元気に暮らせることをめざしている」とされている。さらに、「高齢者だけではなく、地域の障害者や子育て中の親など、閉じこもり、孤立しがちな人たちが気軽に集まり仲間づくりができる活動」ともされている。従って、「ふれあい・いきいきサロン」の対象者は高齢者や障害者、子育て中の親などであり、運営の担い手は、当事者と住民ボランティアが協力しながら自発的に行う活動である。そして、開催場所は自宅でも野外でもよく、活動内容も当事者が自由な発想で企画することが重要であるとされている。また、高齢者を対象にした場合の「ふれあい・いきいきサロン」の効果については、「①楽しさ・生きがい・社会参加、②無理なく体を動かせる、③適度な精神的刺激、④健康や栄養について意識する習慣がつく、⑤生活のメリハリ、⑥閉じこもらせない」と整理されている。なお、「ふれあい・いきいきサロン」の数は、2003年4月現在、全国で約3万7000か所であり、今日においても増加傾向にあるとされている。⁽¹⁾

本研究の目的は、実際に「ふれあい・いきいきサロン」に参加したことがある高齢者にとって、「ふれあい・いきいきサロン」がどのような意義を持っているのかについて考察することである。また、本研究の方法は、新潟市北区内で開催されている高齢者のための「ふれあい・いきいきサロン」を無作為に5か所抽出し、これらの「ふれあい・いきいきサロン」に実際に参加している高齢者に対して個別面接調査を実施し、その回答内容を分析することによって、参加者の視点から「ふれあい・いきいきサロン」の意義を考察する方法を用いるものである。従って、本研究の意義は、全国社会福祉協議会が高齢者を対象にした場合の「ふれあい・いきいきサロン」の効果について、「①楽しさ・生きがい・社会参加、②無理なく体を動かせる、③適度な精神的刺激、④健康や栄養について意識する習慣がつく、⑤生活のメリハリ、⑥閉じこもらせない」と整理しているが、これらの諸点について実際に「ふれあい・いきいきサロン」に参加している高齢者の視点に基づいて考察を深めることにある。

なお、上述した個別面接調査については、被調査者全員の了承を得て実施したものであり、また、調査結果を公表することについても了承を得ていることを付記しておく。

II 個別面接調査の内容及び結果

本研究の方法については上述したとおりであるが、新潟市北区内で開催されている5か所の高齢者のための「ふれあい・いきいきサロン」を無作為に抽出し、そこに実際に参加している75名の高齢者を無作為に抽出し、2006年9月に個別面接調査を実施した。その調査項目は以下のとおりである。具体的には、①性別、②年齢、③家族構成、④友人・知人の多寡、⑤近所付き合いの多寡、⑥「ふれあい・いきいきサロン」への参加頻度、⑦個人的な趣味の有無、⑧家庭における役割の有無、⑨参加者としての視点からみた「ふれあい・いきいきサロン」の意義、についてである。

以上の調査項目のうち、③家族構成、④友人・知人の多寡、⑤近所付き合いの多寡、⑥「ふれあい・いきいきサロン」への参加頻度、⑦個人的な趣味の有無についての項目は、全国社会福祉協議会が「ふれあい・いきいきサロン」について、「ひとり暮らしであったり、家族がいても昼間一人きりで、会話をする相手もなく閉じこもりがちに暮らしている高齢者などが、気軽に出かけて仲間づくりをしたり、一緒に食事をするにより、高齢者がいきいきと元気に暮らせることをめざしている」と位置づけていることを深めるための調査項目である。また、⑨参加者としての視点からみた「ふれあい・いきい

きサロン」の意義についての調査項目は、全国社会福祉協議会が高齢者を対象にした場合の「ふれあい・いきいきサロン」の効果について、「①楽しさ・生きがい・社会参加、②無理なく体を動かせる、③適度な精神的刺激、④健康や栄養について意識する習慣がつく、⑤生活のメリハリ、⑥閉じこもらせない」と整理しているが、本研究においては、これらの諸点についてさらに深めることを目的としているため、あえて非構造的調査項目を用いる技法によって、参加者としての視点からみた「ふれあい・いきいきサロン」の意義について調査するための項目である。

なお、調査結果は以下のとおりである。

- ①被調査者に占める男女別の割合は、男性が22名(29%)で女性が53名(71%)である。個別面接調査の対象者は無作為に抽出しているため、これは高齢者「ふれあい・いきいきサロン」への参加者全体についての男女の割合ではない。しかし、現実問題としては女性の参加者のほうが男性の参加者よりも多いのが実態である。
- ②被調査者の年齢構成については、50歳台が1名(1%)、60歳台が17名(23%)、70歳台が32名(43%)、80歳台が23名(31%)、90歳台が2名(3%)であり、70歳以上が77%を占めている。しかし、この調査項目についても調査対象者を無作為に抽出しているため、高齢者「ふれあい・いきいきサロン」への参加者全体についての年齢構成比を反映しているものではない。しかし、高齢者「ふれあい・いきいきサロン」への参加者の中で70歳以上の参加者が占める割合は相対的に多数であるのが実態である。
- ③被調査者の家族構成については、一人暮らしが8名(11%)、夫婦のみ世帯が18名(24%)、その他が49名(65%)であり、高齢者のみの世帯は26名(35%)である。現実的にも新潟市北区内においては、高齢者のみの世帯はその他の世帯よりも少数である。
- ④被調査者の友人・知人の多寡については、「友人・知人が多い」が47名(63%)で「友人・知人が少ない」が28名(37%)であり、新潟市北区内の「ふれあい・いきいきサロン」の参加者における友人・知人関係は相対的に豊かであることが推察できる。
- ⑤被調査者の近所づきあいの多寡については、「近所づきあいが多い」が43名(57%)で「近所づきあいが少ない」が32名(43%)であり、新潟市北区内においては高齢者の近隣関係は一定の関係が築かれていることが推察できる。
- ⑥被調査者の高齢者「ふれあい・いきいきサロン」への参加頻度については、「毎回参加する」が57名(76%)、「ほぼ毎回参加する」が3名(4%)、「時々参加する」が7名(9%)、「数回参加した」が8名(11%)である。約8割の被調査者が毎回参加しており、高齢者「ふれあい・いきいきサロン」への参加者は概ね固定している傾向にあることが推察できる。
- ⑦被調査者の個人的な趣味の有無については、「趣味を持っている」が48名(64%)で「趣味を持っていない」が27名(36%)である。従って、個人的な趣味を持っていても高齢者「ふれあい・いきいきサロン」に積極的に参加している高齢者の割合が相対的に高いといえる。
- ⑧被調査者の家庭における役割の有無については、「役割がある」が49名(65%)で「役割がない」が26名(35%)である。従って、家庭における役割を持ちつつ高齢者「ふれあい・いきいきサロン」に参加している高齢者の割合が相対的に高いといえる。
- ⑨参加者としての視点からみた高齢者「ふれあい・いきいきサロン」の意義については、「話をするのが楽しい」が59名(79%)、「活動が楽しい」が26名(35%)、「食事が楽しい」が1名(1%)、「分からない」が2名(3%)であり(複数回答)、73名(97%)の被調査者が高齢者「ふれあい・いきいきサロン」について積極的に肯定している。この意味では、全国社会福祉協議会が「ふれあい・いきいきサロン」について定義している「地域を拠点に、住民である当事者とボランティアとが協働で企画し、内容を決め、共に運営していく楽しい仲間づくりの活動」であることを裏付けている結果になっている。また、全国社会福祉協議会が高齢者を対象にした場合の「ふれあい・いきいきサロン」の効果について、「①楽しさ・生きがい・社会参加、②無理なく体を動かせる、③適度な精神的刺激、④健康や栄養について意識する習慣がつく、⑤生活のメリハリ、⑥閉じこもらせない」と整理していることと比較すると、「④健康や栄養について意識する習慣がつく」ことを除いて一定の共通性が見出せる。

Ⅲ 個別面接調査結果の分析及び考察

以下では個別面接調査の結果について分析し、参加者の視点からみた高齢者「ふれあい・いきいきサロン」の意義について考察する。

第一に、無作為に抽出した高齢者「ふれあい・いきいきサロン」に実際に参加している75名の高齢者のうち、73名(97%)の高齢者が高齢者「ふれあい・いきいきサロン」の意義を肯定的に評価しており、このことを前提にして個別面接調査の結果を分析し考察することが必用であるといえる。

第二に、個別面接調査の結果によれば、一人暮らしと

夫婦のみの世帯以外の家族構成である高齢者が49名（65%）を占め、友人・知人が多いと回答した高齢者が47名（63%）で、近所づきあいが多くと回答した高齢者が43名（53%）であり、趣味を持っていると回答した高齢者が48名（64%）を占め、家庭における役割を持っていると回答した高齢者が49名（65%）を占めていることは、家族構成、友人・知人の多寡や近所づきあいの多寡、趣味を持っているかどうかや家庭における役割を持っているかどうかに関わらず、被調査者のほとんどが高齢者「ふれあい・いきいきサロン」を肯定的に評価していることになり、このことも個別面接調査の結果を分析し考察する場合の前提にする必要があるといえる。

さて第三に、全国社会福祉協議会が高齢者を対象にした場合の「ふれあい・いきいきサロン」の効果について、「①楽しさ・生きがい・社会参加、②無理なく体を動かせる、③適度な精神的刺激、④健康や栄養について意識する習慣がつく、⑤生活のメリハリ、⑥閉じこもらせない」と整理していることについては上述したとおりであるが、これは高齢者の望ましい生活のあり方を想定して、そのことに貢献しているのが高齢者「ふれあい・いきいきサロン」であるとの考え方に基づくものであろう。しかしながら、75名の実際に高齢者「ふれあい・いきいきサロン」に参加している高齢者を対象にした個別面接調査においては、上述したように、友人・知人が多く、近所づきあいも多く、趣味を持っていて、家庭における役割も持っている被調査者のほとんどが高齢者「ふれあい・いきいきサロン」を肯定的に評価していることになる。このことを前提にして考えると、高齢者を対象にした「ふれあい・いきいきサロン」の意義は、「①楽しさ・生きがい・社会参加、②無理なく体を動かせる、③適度な精神的刺激、④健康や栄養について意識する習慣がつく、⑤生活のメリハリ、⑥閉じこもらせない」としてのみ整理するだけでは不十分であると指摘できることになる。具体的には、「ふれあい・いきいきサロン」の意義について考える場合、個々の高齢者の望ましい生活のあり方を想定して、個人個人を取り巻く環境要因を充実させていくことに貢献することを高齢者「ふれあい・いきいきサロン」の意義として理解することも基本となる考え方であるには違いないが、同時に、高齢者を地域社会の一員として理解し、地域社会のあり方に立脚にした「ふれあい・いきいきサロン」の意義についても探求していく必要があると考えられる。

つまり第四に、高齢者を対象にした「ふれあい・いきいきサロン」の意義は、高齢者の住民同士としての交流を創出していることなど、高齢者が地域社会を構成する一員として位置づけられるもとで理解される必要があるといえる。このことについて大倉福恵は、「平成6年に

全国社会福祉協議会により提唱された『ふれあい・いきいきサロン』は、わずか10数年で急速に設置数が増えており、こうした広がりを持ったサロン活動の効果については、高齢者を対象に考えた場合、閉じこもり防止や介護予防、仲間づくり等のさまざまな効果があるといわれている。しかし、サロン活動が地域社会にどのような効果をもたらしているのかについても明らかにしていくことが必要である。サロン活動は、途切れていた住民のつながりを再構築する場や、新たな出会いやつながりの場としての効果があると考えられる。サロン活動は、地域組織化（地域の拠点に人が集まり、集まった人たちが協力して地域のことを考える、小さな地域福祉の共同体の場をつくること）の手法として位置づけられる⁽²⁾と指摘している。こうした指摘を踏まえれば、高齢者を対象にした「ふれあい・いきいきサロン」の意義は、高齢者を個人単位で理解し、その生活を豊かにしていく意義を持っているものであると同時に、地域社会を構成する一員である高齢者同士のつながりを再構築する場としての地域社会づくりの意義も併せ持っているといえる。

このことに関する他の指摘を引用するならば、2007年10月に厚生労働省社会・援護局に設置された「これからの地域福祉の在り方に関する研究会」が、「地域は、隣人たちとの社会的な関係の中で、それぞれの住民が自分らしい生き方を実現していく場であり、歳をとっても、障害があっても、住み慣れた地域で自分らしい生き方を全うできることが、その人の尊厳を支えることになる。その意味で、地域の生活課題に取り組むことは、取り組む側にとって自己実現につながるだけでなく、支援される者にとっても地域で自己を実現し、尊厳ある生活が可能となるものでもある⁽³⁾」とし、また、「地域は人々が暮らす場であり、子育てや青少年の育成、高齢者や障害者の支援、健康づくり、そして人々の社会貢献や自己実現など、様々な活動の基本となる場である。特に、少子高齢化の中で世帯の少人数化や家族の機能のさらなる低下が進み、住民が地域の交流や支え合いに期待するところは大きい。また、人々のつながりができ、地域のまとまりが高まると、自殺や非行などが減るといわれており、地域社会を再生することは、現代社会が抱えている様々な問題を解決する有効な方法の一つでもある⁽⁴⁾」とも述べているが、このような視点に立って高齢者のための「ふれあい・いきいきサロン」の意義についても検討することが求められるといえる。

すなわち、高齢者を対象にした「ふれあい・いきいきサロン」は、高齢者を個人として把握し、その望ましい生活のあり方として想定できる「①楽しさ・生きがい・社会参加、②無理なく体を動かせる、③適度な精神的刺激、④健康や栄養について意識する習慣がつく、⑤生活

のメリハリ、⑥閉じこもらせない」ことを実現する意義を持っていることは当然であるが、同時に、「途切れていた住民のつながりを再構築する場や、新たな出会いやつながりの場」としての文脈の中で把握し、「地域社会を再生する」意義を持つものとしても理解される必要があるといえる。この意義は、「ひとり暮らしであったり、家族がいても昼間一人きりで、会話をする相手もなく閉じこもりがちに暮らしている高齢者」に限られるものではなく、個人的趣味の多寡、知人や友人の多寡、近隣関係の多寡、家庭での役割の有無などに関わらず、地域社会を構成する一員であるすべての高齢者に当てはまるものである。また、高齢者の望ましい生活のあり方を考える場合、家庭における役割や趣味および近所づきあいを豊かにしていくことなどをはじめとして、高齢者個人を取り巻く環境要因を充実させていくことは当然であるが、高齢者を地域社会の一員として捉え、高齢者一人ひとりの地域社会における人間関係を豊かにしていくことも重要な課題であると指摘できる。

最後に、本研究は2006年度新潟医療福祉大学研究奨励金に基づく研究であることを付記する。

文献

- 1) 斎藤貞夫「小地域福祉活動とネットワーク活動の推進」『新版・社会福祉学双書』編集委員会編『社会福祉協議会活動論』全国社会福祉協議会, 2005, pp73～74
- 2) 大倉福恵「ふれあい・いきいきサロン」活動における効果についての考察」日本地域福祉学会第22回全国大会実行委員会編集『日本地域福祉学会第22回全国大会要旨集』日本地域福祉学会, 2008, p111
- 3) これからの地域福祉のあり方に関する研究会『地域における新たな支え合いを求めて』全国社会福祉協議会, 2008, p 39
- 4) 同上, p 151